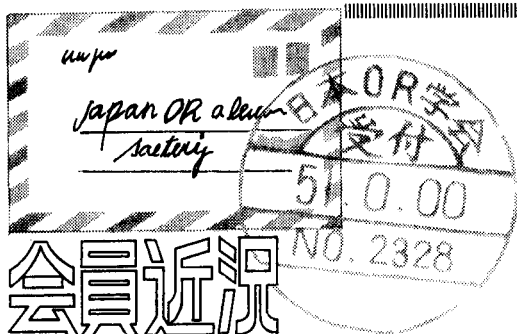




洞実験を計画実施中である。OR以前の課題であると受けとめている。

以上にかぎらず、脳、生体、社会、自然界にみられる流れの現象過程やシステム構造の数理モデル化に関心をもっている。合理的な行動選択の社会的要請に応えるべく、OR学会員の研究の今後のご発展をご期待申し上げます。

(他の所属学会) 日本行動計量学会、計測自動制御学会、TIMS

日本専売公社関東支社
市場調査課

伊東 映仁

合理的基準の再検討 「電子技術のライフサイクルが人生のライフサイクルより短くなったため、大卒労働者の俸給と地位が年齢とともに低下しつつある」という米国のニュースが報ぜられた。

技術進歩が「頭脳の取替え」までも引き起こす時代になってきていることを思うとき、従来、経済学や経営学などの社会科学の分野で合理的基準と称するものの再検討が迫られている。

その意味で「人間の機能の外延化」として「道具から社会システムまで」を「機械」の概念でとらえた「機械の現象学」(岩波哲学双書)は、一読に値する力作であろう。

エマーズ
技術顧問

小島 光造

結婚式場のOR的考察 「結婚式場の問題をOR的に考える」これは大変興味しんしんたるテーマかもしれませんが、筆者が都内のM結婚式場から相談を受けたのは1年以上も前のことでした。結婚式場といえば、たいていはホテルとか、レストランなどと兼業しているところが多いのですが、ここは結婚式だけをやっているというユニークな特徴もっていたのです。私も大変はずかしい話ですが、結婚式場で結婚したこともないし、当初はまるで勝手がわからなかったというのが実情でした。したがって、まったく白紙の立場で、イロハから勉強することからはじめなければならませんでした。勉強の結果、ほかの業種と違っていちじるしい特性のあることがわかりました。その主なものをあげてみましょう。

第1は営業面の問題でした。この特徴はいうまでもなく、結婚シーズンは春と秋という習慣のため、季節的変

日立電子サービス(株) 篠原 邦武

後方支援計画とOR 最近、信頼性、安全性ということがあらゆる製品に強く要求されるようになった。小生はコンピュータのメンテナンス業務に関係し、信頼性・保全性工学に興味をもっています。最近読んだ雑誌一品質管理(1975, 11月号, 日科技連)一の中にMIL規格の解説が豊富にわかりやすく集録されていた。この中に、システムおよび装置に対する後方支援統合計画の開発(DOD 4100-35 "Development of Integrated Logistic Support for Systems and Development")についての考え方が定性的に紹介されていた。これは兵器システムの有事即応性を確保するために規格化されたものであるが、この考え方はコンピュータ・ハードウェアシステムにもあてはまると考えられる。後方支援計画を具体的に進めるには、オペレーションズ・リサーチの知識も必要となってくるであろうと思われる。

通産省工業技術院機械技術研究所
システム部数理工学課

高橋 昭

沿道大気汚染の予測 ここ数年、都市公害の1つである自動車排出ガスによる沿道大気汚染を予測することを考えている。おもに都市交差点近辺における有害ガスの路上排出分布、拡散汚染分布、広域道路網上の排出総量の数理・物理的な予測を意図している。

これまで実用車27台のシャーシダイナモ実験や交通・気象のフィールド・スタディをやってきたが、昨年はSF₆のトレーサ実験を都内2カ所で、また昨年から風

動がきわめて大きく、夏の期間はほとんど仕事がないという状況です。さらには日本人の六曜に対する根強い執念がある反面、仕事の都合を考えるとやはり七曜が基準になるという事情もあり、大安と休日が重なった時などは大入り満員となるに比べ、その他の日は必ずしも満席とはならず、仏滅の日などは、土、日といえどもきらわれるという現象があることなのです。

このような現象から問題点として浮かび上がったことは、このアンバランスな営業状況をいかにして平準化し、売れ残り損失を最小にする工夫はないかということが当面の課題でした。将来のことを考えると、数年先には結婚組数の絶対値が半減するという不可避の条件に対応し、いかにして申込数の低下を防ぐかというのも大きな問題でした。結婚式場の営業ということをよくよく考えてみますと、これぐらい日本人気質と密着しているものはあるまいと思われるし、早急に結論を出すことにも問題があるので、今後の課題とすることにしました。ただし、はっきりいえることはピュアなものと泥臭いものとの、バランスしてないと日本人には受けないという基本的原則だけは守る必要があるということでした。

第2は、注文をうけてから最後に結婚式を終えて精算し、領収書発行までの事務処理に関することでした。この事務処理システムをいかにによりシステムティックなシステムにするかというのがねらいです。当然これには

コンピュータをどう使ったら利益があるかという課題もあるわけです。結婚式となるとどういうものがいいのでしょうか。新郎新婦の晴着をなににするか、どれくらいの値段のものにするかなどはまだいいとしても、指輪、写真、飾花、引出物、ウェディングケーキ、被露宴の料理、飲物等々のことについて、どんなものをいくらということを考えなければなりません。指輪にしろケーキにしろこれらのおのおのには、種類がいくつもあり、おそらく全部の組み合わせを計算したら何千という数字になるでしょう。この何千という組み合わせの中から選択するのはただのひとつなのです。これは大変な仕事であり、おそらく双方の親元にとっては、式を無事すませて、新郎新婦をハネムーンに送り出したあと、ヤレヤレとほっとすることでしょう。

さてここで結婚式場側として、お客様にサービスする立場でみた場合どうあるべきでしょうか。細部については省略しますが、基本的なこととしては、きめ細かいサービスを忘れてはならないことと、複雑な事務の流れの中でいささかも勘定を間違えて、信用を落とすことのないようにすることでした。ちなみにこの事務の流れを全面的に機械化することにはメリットがないという結論の出たことも付記しておきます。このように述べてくると、なんのことはないのがっかりする向きもあらうかと思いますが、あんがいこれもコロンブスの卵かも。

《明日への数字》

腹八分目のOR

腹八分目という言葉は、ORを志す者にとって、なかなか含蓄のある言葉と思えることがありそうです。辞書によると、10分の8とか、控え目という意味ですが、おいしいからといって、むやみに食べすぎてはお腹をこわしますし、だからといって、食べないでいればカロリー不足で栄養不良となり、健康を害することになります。

八分目とは、この程度食事をしていれば、瘠せも肥りもしない適度な量の目安をいったものですが、ORマンにとって、あんが이의射た言葉と思われる時があるような気がします。

ご承知のとおり、統計のほうで、第1種の誤りとか第2種の誤りという言葉がありますが、なんでも信用しすぎても、信用しなさすぎてもいけないうわけです。

また、ORで最適量という言葉を使いますが、これは両極端ではない、文字どおり最もふさわしい量であって、いいかえれば、腹八分目の量といえなくはない場合が少なくありません。

たとえば、経済環境のきびしい昨今において、特に重要と思われる在庫の問題でいえば、その企業にとって適当な量というものがあって、それは多すぎても少なすぎても良くない、ほど良い量なのです。

次に、待ち行列における窓口の数について考えてみると、この窓口の数は、少なすぎではサービス不足になる一方、多すぎでは不経済となるので、結局、中間に適当な数の窓口が考えられるわけです。

このように、現実の問題をOR的に考えてみると、たいいていの場合、多すぎでも少なすぎでもない適当な量があって、それが最適量になることが多いように思われます。

ときに、これを、腹八分目のORと呼んではいかがでしょうか。 (天野豊治)